

# 出雲・石見接境地帯方言の動態

——『中国地方五県言語地図』との比較を中心にして——

野々村 憲・高永 茂

Movement of the dialects in Border area between Izumo and Iwami

—— Comparison with “LINGUISTIC ATLAS OF THE FIVE PROVINCE OF WEST JAPAN” ——

Ken NONOMURA and Shigeru TAKANAGA

**Key words** : 出雲 Izumo, 石見 Iwami, 言語地理学 linguistic geography, 語彙 vocabulary

## I はじめに

島根県地域に関する言語地理学的調査には、『日本言語地図Ⅰ～Ⅵ』（国立国語研究所，昭和41年から昭和49年）と『中国地方五県言語地図』（広戸惇，昭和40年）に代表される業績がある。これらの地図を見ると，多くの調査項目で，出雲地方と石見地方において，かなり明確な事象上の差異が存することがわかる。日本の方言は江戸時代に大きく発達した。その原因の一つは，当時の幕藩体制にあった。出雲地方と石見地方も，江戸時代にはそれぞれ出雲国と石見国であった。隣接はしていても，それぞれの領内で固有の方言状況が生じたものと考えられる。

本稿で分析ならびに考察を試みる言語調査は，後述するように昭和61年に実施したものである。上記の二つの調査との間には，調査年で約25年の隔りがある。この25年の間にいかなる言語変容がこの地域に起きたかは，興味深い問題である。

## II 研究の目的

方言地理学の立場から言えば，接境地帯は，言語変容のもっとも激しい地域である。そこでは，異なる方言どうしがしばしば接触や干渉を起こしており，その結果としてさまざまな言語事象が観察される。ある場合には，一方の語詞がそのまま残り，他方の語詞は消滅する。またある場合には，二つの方言の語詞が両方とも消滅し，第三の語形が発生することもある。そし

て，個々の語詞を地図上に配すると，これらの諸事象は，言語分布としてその姿を現すことになる。

本稿の目的は，『中国地方五県言語地図』と，本調査によって得られた言語資料とを比較することによって，約25年の間に言語分布がいかに変化したか，あるいは変化しなかったかを検証することである。さらに，言語分布に変化が認められた場合には，その変化の様相を分析し，原因を探っていきたいと考えている。

## III 調査の方法

島根県における旧出雲国と旧石見国の国境で，一定の幅を持つ地域に，“出雲・石見接境地帯”という領域を設定して，方言地理学的調査を行った。

この調査地域を設定するにあたっては，島根県内における地理的東限を，島根県東部を流れる斐伊川とし，また地理的西限を，島根県中部を流れる江の川とした。本稿の分布地図に示す調査区域の通りである（図1～図10）。

調査した期間は，昭和61年4月から10月までである。現地調査は，野々村がおこなった。

調査地域内の調査地点数は，出雲地域が34地点，石見地域が33地点，総計67地点となった。

本調査においては，1調査地点につき3名を被調査者として選定した。それは次の通りである。

- (a) 老年層男性1名
- (b) 老年層女性1名
- (c) 若年層男子1名

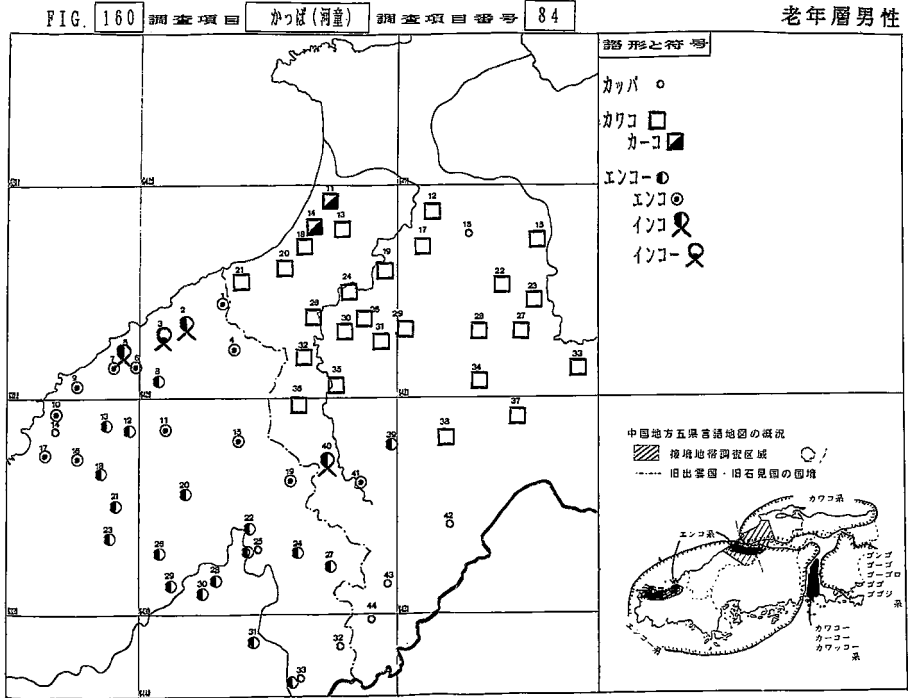


図1 「かっぱ(河童)」

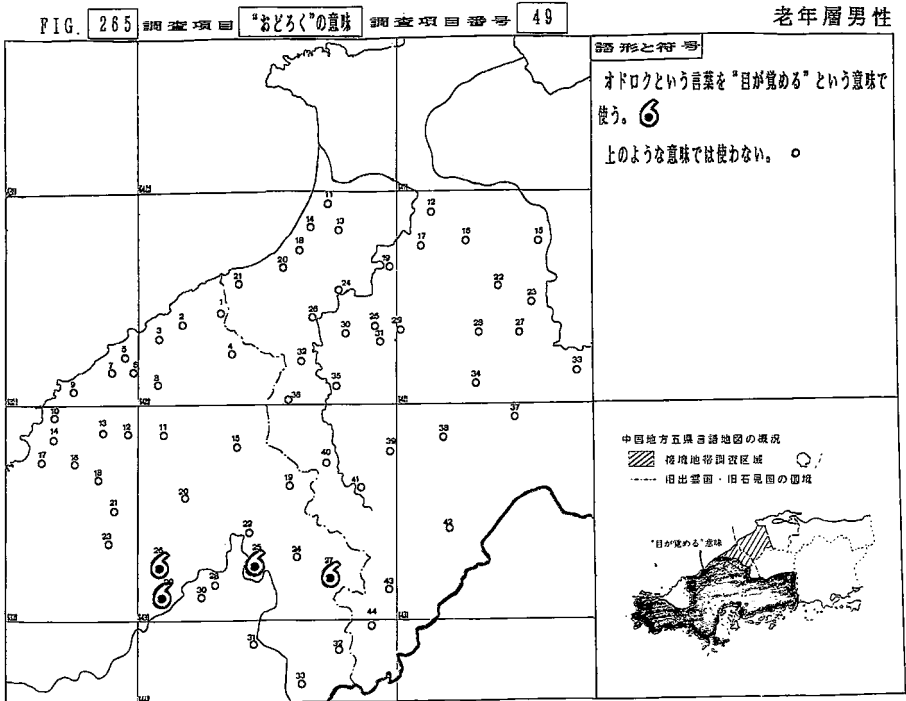


図2 「“おどろく”の意味」

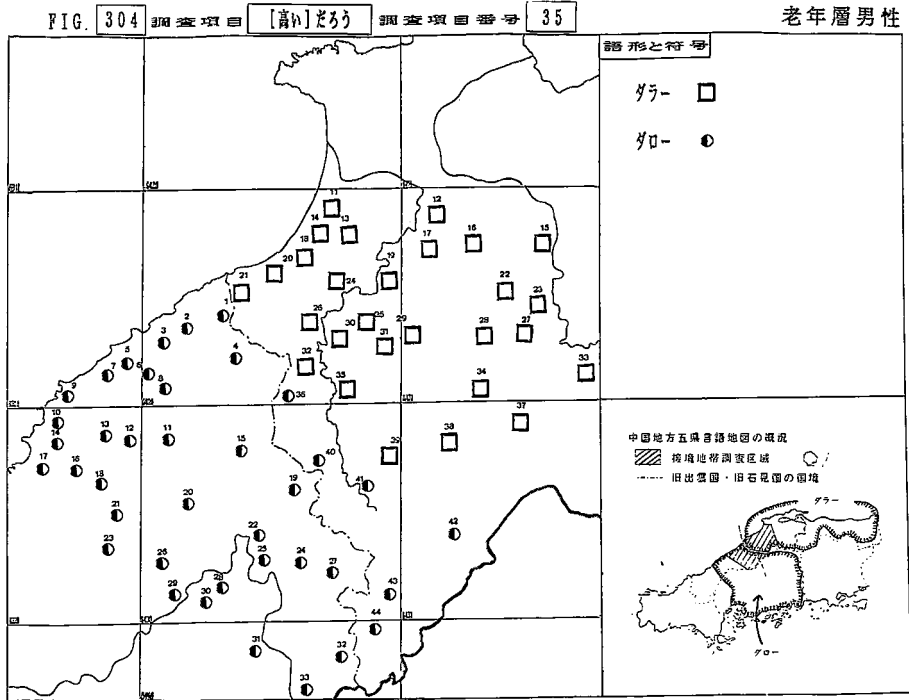


図3 「(高い) だろう」

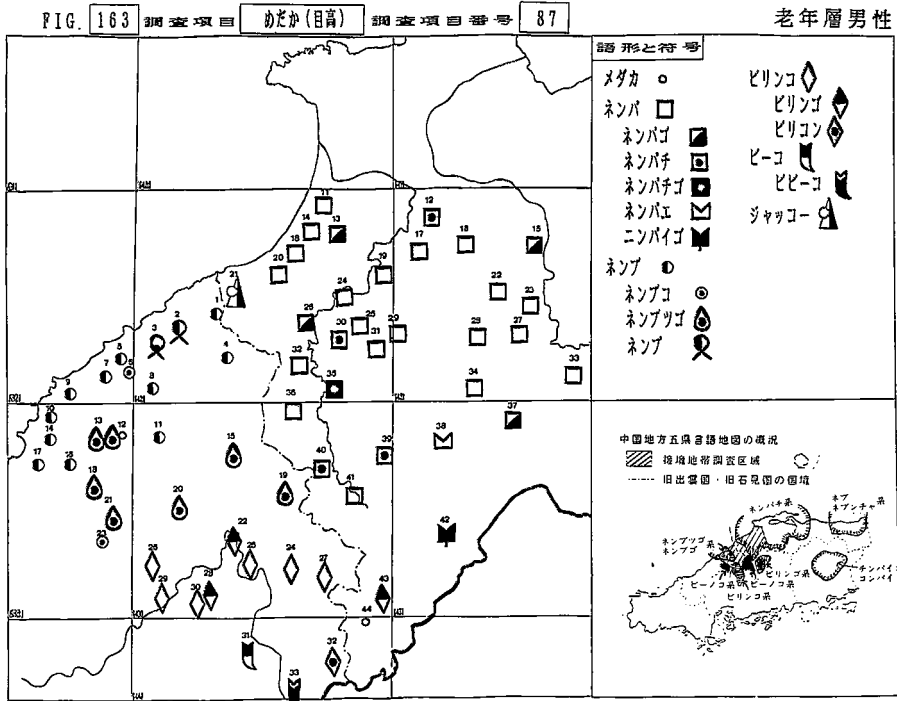


図4 「めだか(目高)」

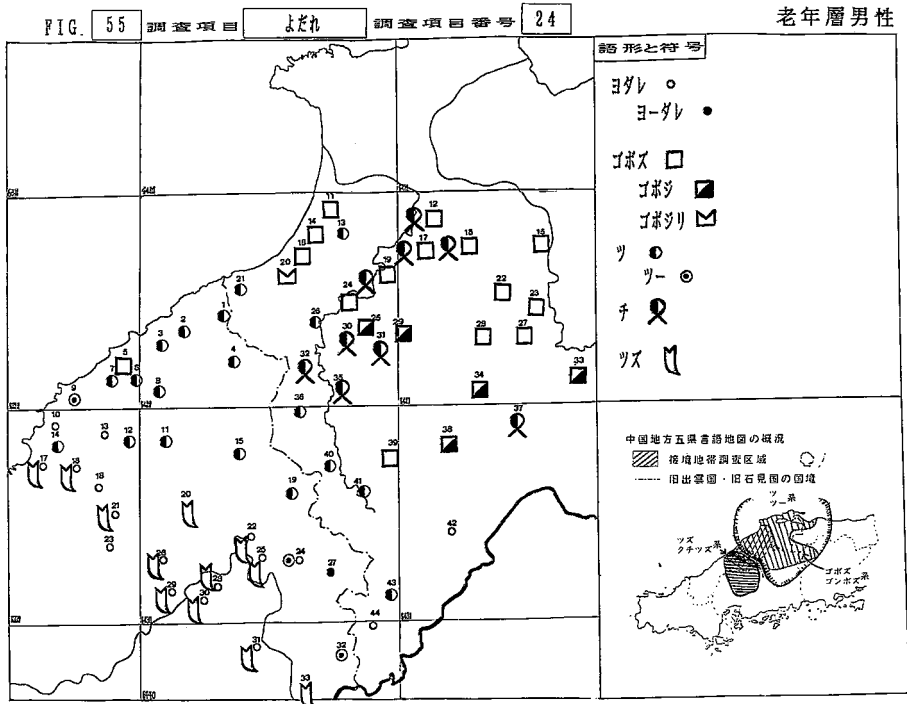


図5 「よだれ」

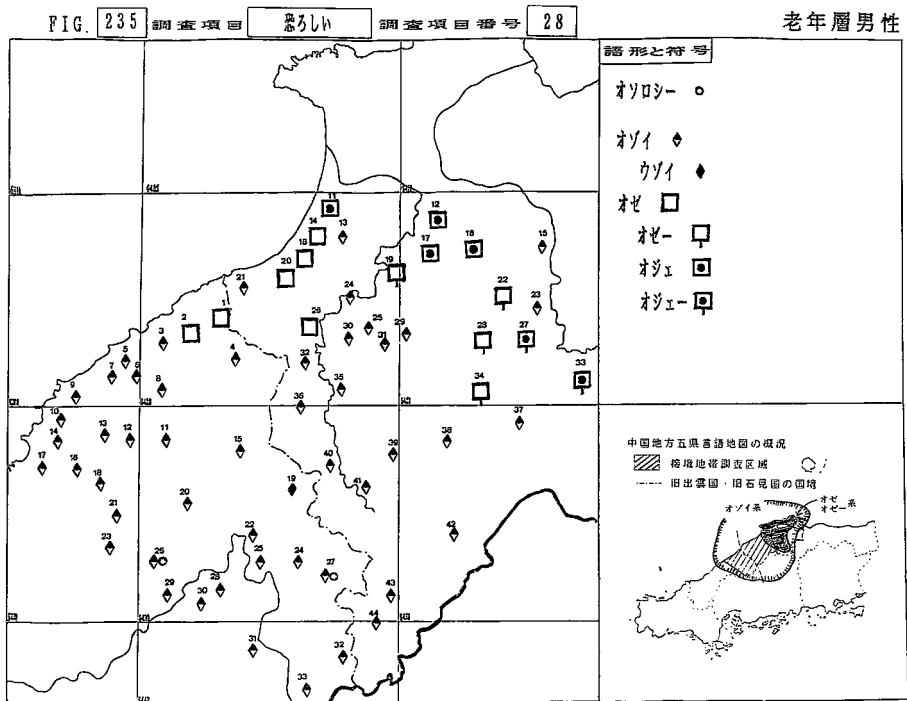


図6 「恐ろしい」

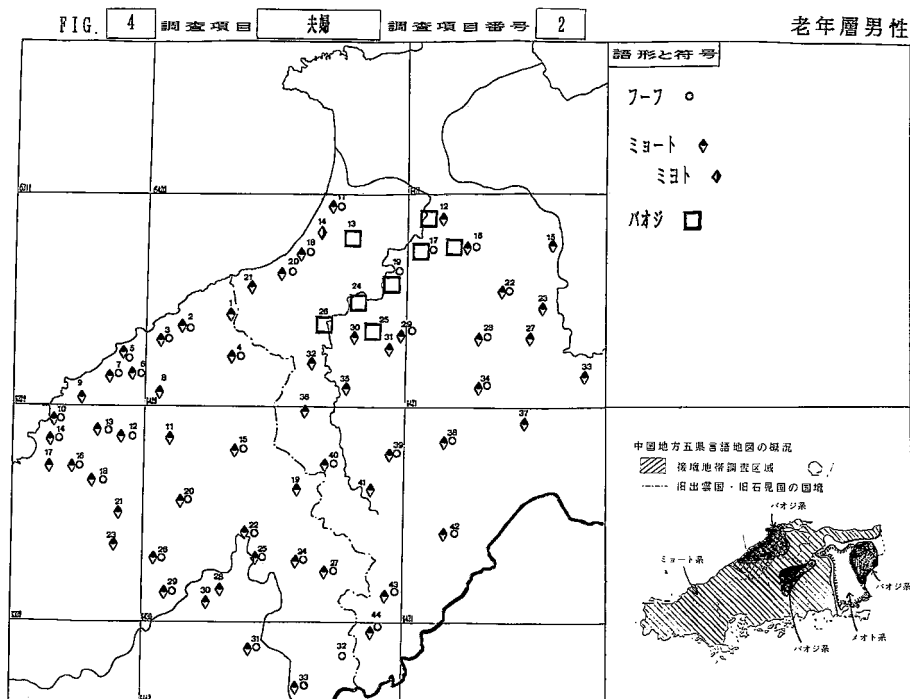


図7 「夫婦」

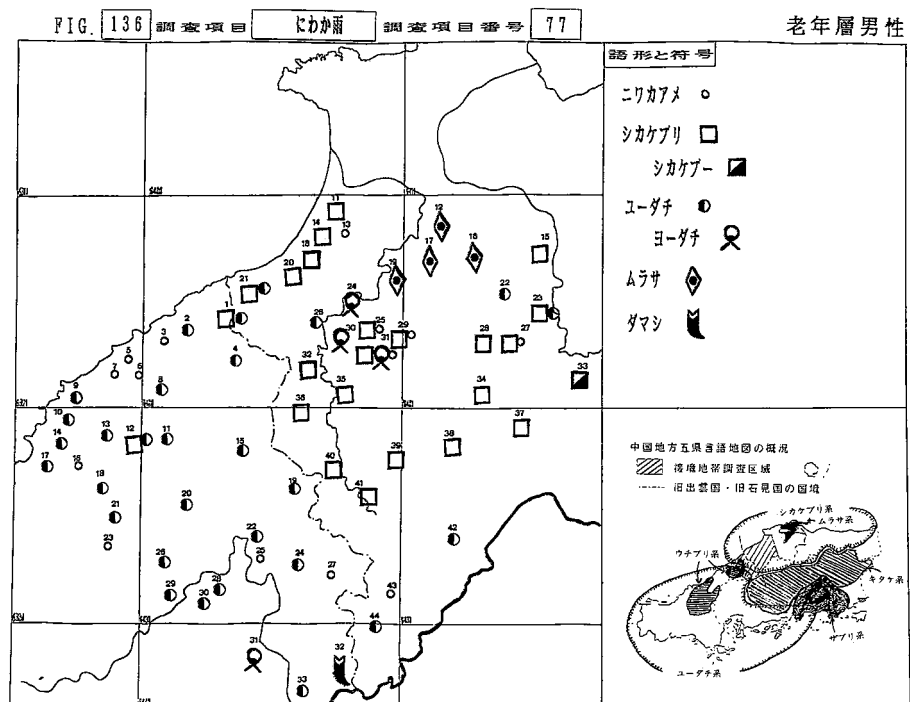


図8 「にわか雨」

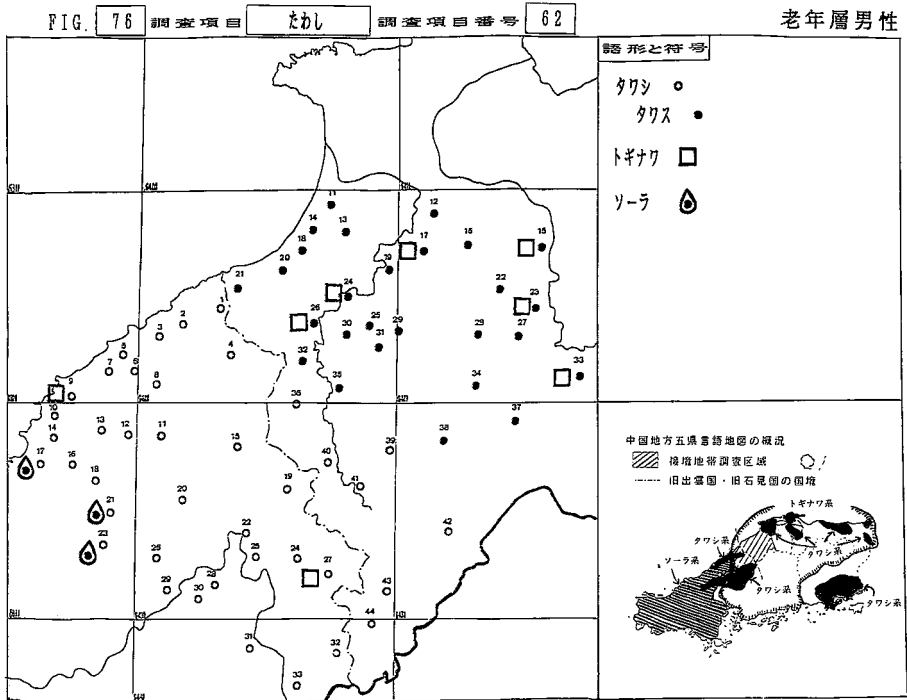


図9 「たわし」

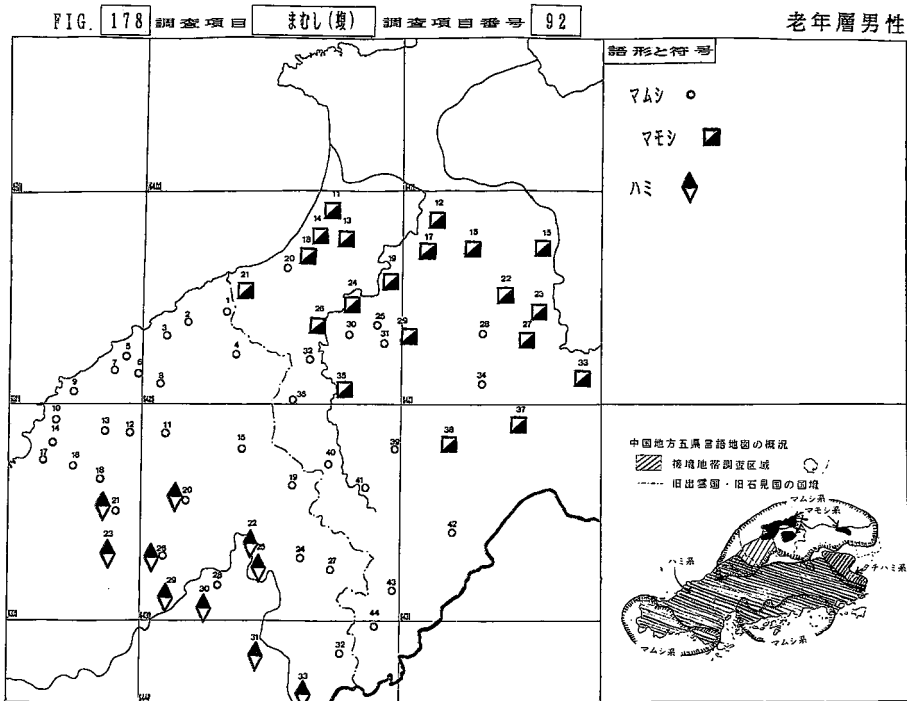


図10 「まむし(蝮)」

以上で、被調査者総数は201人となった。

本調査では、「方言語詞調査」と「方言待遇表現法の意識調査」とを実施した。「方言語詞調査」における調査項目としては104項目、「方言待遇表現法の意識調査」としては125項目、総計229項目の調査項目を選定した。

「方言語詞調査」の質問形式は、なぞなぞ式質問形式・選択式質問形式・Yes-No式質問形式の3形式である(注)。また「方言待遇表現法の意識調査」では、例文を作り、調査者が口頭で発言する形式をとった。

本稿では、『中国地方五県言語地図』との比較・考察をする資料として、「方言語詞調査」のうち、老年層の分布地図をとりあげた。

#### IV 『中国地方五県言語地図』との比較

『中国地方五県言語地図』と比較したときの変化の様態を、以下、4項目にわけて説明する。その手順は、まず本調査で得られた方言分布を概説した後に、『中国地方五県言語地図』との比較を行うものとする。

##### 1. 小変化型

『中国地方五県言語地図』の調査時から、約25年経た後にも、その分布がほとんど変わっていない語詞が、調査項目中の約7割にのぼることがわかった。ただし、一言で「小変化型」といっても、語詞の示す分布の様相はさまざまである。そこで、大きく次の二つのパターンにわけて説明を加えたい。

##### 1) 単純な分布

###### (a) 「かっぱ(河童)」(図1)

カワコが飯石郡赤来町と頓原町一帯をのぞく、出雲エリア北部全域に広く分布しているのが見られる。一方、エンコ・エンコーは、出雲エリア南部も含み、石見エリア全域において広く分布しているのが見られる。とくにエンコは、石見エリアの北部に遍在し、エンコーは石見エリア南部に遍在しているようである。地図上では、上記のカワコと、エンコ・エンコーとが対立しているのが見られる。エンコ・エンコーと類似した語形であるインコ・インコーは、石見エリア北端部と出雲エリア南部の国界付近にそれぞれ若干の分布が見られる。

###### (b) 「“おどろく”の意味」(図2)

「オドロク」を“目が覚める”という意味で使っている地域は、石見エリア南部の邑智町内である。ただし、この分布は若干である。この地域の分布域をのぞ

く接境地帯全域においては、すべて「オドロク」を“驚く”の意味で使用しているのが見られる。

###### (c) 「(高い) だろう」(図3)

飯石郡赤来町と頓原町一帯をのぞく、出雲エリア全域において、ダラーが広く分布しているのが見られる。一方の赤来町と頓原町と石見エリアにおいては、ダローが広く分布しているのが見られる。地図上では、このダラーとダローが対立している。

##### 2) 複雑・重層的な分布

###### ・「めだか(目高)」(図4)

ネンバを中心として、ネンバゴ、ネンバチ、ネンバチゴ、ネンバエ、ニンパイゴといった語形群が出雲エリアにおいて、南端部(飯石郡赤来町)をのぞく、ほぼ全域に広く分布しているのが見られる。一方、ネンブを中心として、ネンブコ、ネンブツゴ、ネンブといった語形群は、石見エリア北部一帯に広い分布が見られる。この中でも、とくにネンブ・ネンブは石見エリアの北部海岸域に分布が集中している。また、石見エリア南部一帯には、ピリンコ、ピリンゴがまとまって分布しているのが見られる。石見エリアの特に南端において、ビーコ、ビビーコが若干分布しているのが見られる。地図上では、上記のネンバ系とネンブ系とピリンコ系とが鼎立していると見ることができよう。

##### 3) 小変化型の比較の結果

「かっぱ」「おどろく」の意味、「(高い) だろう」のような単純な分布を示すものから、「めだか(目高)」といった、相当に複雑な分布を呈するものまである。語詞の張り合い関係が、そのまま持続されてきた結果と考えることができる。小変化型は上記以外にも、多く見られた。

#### 2. 西進型

##### 1) 「よだれ」(図5)

ゴボズ・ゴボジは、石見エリアに若干の分布が見られるが、おもに出雲エリア北部一帯に広く分布している。また、斐伊川中流域を中心とした出雲エリア北部一帯においてのみ、チの分布が見られる。ツズは、石見エリア西部および南部においてのみ分布が見られる。ツ・ツーは石見エリア北部一帯と出雲エリア西部一帯に広い分布が見られる。共通語形ヨダレは、出雲エリアに若干の分布が見られるが、おもに石見エリアにおいて、北東部をのぞく全域に分布が見られる。

##### 2) 「恐ろしい」(図6)

出雲エリア北部一帯に、オゼ(一)・オジェ(一)

の分布が見られる。これらの語形の分布域をのぞく接境地帯全域には、オゾイが広く分布しているのが見られる。地図上では、オゼ(一)・オジェ(一)とオゾイが対立している。

### 3) 西進型の比較の結果

「よだれ」の語詞においては、『中国地方五県言語地図』と比較したとき、ツとチが、接境地帯を越えて、石見地方側まで進出している。『中国地方五県言語地図』では、石見東部にゴボズとネズがある。いまこの地域には、ゴボズもネズもない。石見地方東部に、ツ系の語が進行したためである。出雲地方と広島県備後北部にも、ツ・ツと重なるようにして、ゴボズ、ゴンボズ類が分布していた。この地域のゴボズ系の語に關しても、その分布域が縮小しているようである。

「恐ろしい」においては、『中国地方五県言語地図』と比較すると、オゼが海岸線沿いに、出雲側から石見側へと進出していることがわかる。オゼは『中国地方五県言語地図』を見ると、出雲市周辺のみ分布していた。その周囲には、広くオゾイが分布しているという状況であった。25年間に、オゼが周囲を取り囲んでいたオゾイの間に、割り込んだと見ることができる。

## 3. 東進型

### 1) 「夫婦」(図7)

簸川郡佐田町・出雲市南部にわたる斐伊川中流域一帯にバオジが見られる。また、ミョートは、出雲エリア・石見エリア全域にわたって広く分布しているのが見られる。広範囲にわたって共通語形フーフの分布も見られる。

### 2) 「にわか雨」(図8)

シカケブリが、出雲エリア内において、南端部をのぞく全域に広く分布しているのが見られる。また出雲市には、ムラサの分布が見られる。石見エリア全域には、ユーダチの広い分布が見られる。この語形の音訛形とみられるヨータチは、出雲エリアの簸川郡佐田町一帯において、若干の分布が見られる。接境地帯南部には、ダマシがわずかであるが、分布している。

### 3) 東進型の比較の結果

「夫婦」の語詞の分布を『中国地方五県言語地図』で見ると、石見地方のみならず中国地方全域に広くミョートが分布するなか、出雲市を中心にした出雲エリアにはバオジが分布している。バオジは、出雲地方のほか備後地方の一部にも分布するけれども、その分布は限られている。本調査を行なったときには、バオ

ジがさらに分布地域をせばめ、出雲市周辺だけにしか残っていないという状況になっている。ミョートが、以前にはバオジの分布していた地域にまで進出している。

『中国地方五県言語地図』を見ると、石見地方にウチブリが分布し、出雲地方にシカケブリ系の語が分布している。ユーダチ系の語は、石見地方より西部の中国地方に広く分布している。本調査では、石見地方においてウチブリは収集されなかった。『中国地方五県言語地図』の調査以後、衰退したものと思われる。ウチブリの衰退以後にこの地域へ進出してきたのが、ユーダチ系の語である。中国地方の西半分から九州地方にかけて広い分布域を持つユーダチ系の語は、その勢力を背景にして、東方へ勢力を伸ばしてきたものと考えられる。共通語のユーダチと同語形であることも、その権威を高める効果があるのだろう。

ユーダチ系の語の東進は、石見・出雲接境地帯を越えて、出雲側にも及んでいる。そのため、シカケブリ系の語の分布域であったところにも、この地域にユーダチ系の語が多く分布する状況になっている。『中国地方五県言語地図』の調査時にはほとんど観察されなかった、ユーダチ系の語が、石見・出雲地域にも広く分布するようになっていく。

## 4. その他のタイプ

### 1) 「たわし」(図9)

トギナワが出雲エリア北部と石見エリアの一部にある。ソーラは、石見エリア西部に若干のまとまった分布が見られる。一方、共通語形タワシとその音訛形タワスが全域に広く分布しているのが見られる。ただし、タワスの分布は、出雲エリア北部に限定される。老年層において、すでに方言語形の使用はかなり少なくなり、日常生活ではもっぱら共通語形を使用しているのが現状であろうと思われる。被調査者の中には、“たわし”と“とぎなわ”とを別な物として認識している場合がかなりあった。“たわし”は棕櫚の木から作り、“とぎなわ”は縄を巻いて作る物であるという認識である。

### 2) 「まむし(蝮)」(図10)

マモシが、出雲エリア北部一帯に広く分布しているのが見られる。また、ハミが石見エリア南部にまとまって分布しているのが見られる。これと対照的に、出雲エリア南部一帯・石見エリア北部一帯には方言語形が見られず、共通語形マムシが分布しているのみで



ある。

### 3) 二つの語詞についての比較の結果

本調査時にはタワシ・タワスが石見地方と出雲地方の全域に広く分布していたけれども、『中国地方五県言語地図』を見ると、タワシは出雲地方の北部と石見地方だけに分布し、出雲地方にはトギナワが広く分布していた。トギナワは、出雲地方のみならず、広島県、鳥取県、岡山県にもあり、その分布域は、かなり広いものであった。そのように大きな勢力を持っていたにも関わらず、次第にタワシに取って替わられたものと考えられる。その過程では、トギナワとタワシに意味の分担が起こり、前者が実生活の場から消えるとともに、語自身も消失していったと考えられる。タワシ系の語が、共通語と同語形（あるいは類似形）であったことも、勢力拡大の一因だと考えられる。

マモシは、『中国地方五県言語地図』によると、出雲地方の北部に限って分布していた。その周囲の出雲地方と石見地方は、マムシの分布域であった。マモシは、狭い地域に孤立して分布していたわけである。このマモシが本調査時には、出雲市よりもさらに南部および西部にまで勢力を拡大していることがわかった。

## V 考 察

『中国地方五県言語地図』の調査から25年の年月を経た時点でこの調査を実施したのであるけれども、大きな変化の見られない語詞が半数以上（約7割）であった。カワコとエンコ、ダローとダラーのように、二つの語詞が二大勢力として張り合い関係を保っている場合、一方が他方を駆逐することはなかった。両方ともに、相当に広い分布範囲を持っている。それぞれの地域の話者によって、継承され続けているということであろう。小変化型の傾向は、比較的単純な分布だけでなく、かなり複雑な分布を示す語詞においても見られた。「めだか（目高）」の語詞は、ネンバ系のネンバやネンバゴ、ネンブ系のネンブコ、ネンブゴ、ネンブツゴなど多数ある。老年層は幼年期、青年期、そして成人してからも、一定の地域を生活の場として暮らしてきた。その間には大きな人口の移動もなく、社会構造も安定していた。方言分布において変化が少ないことは、その結果とみることができる。この時期はまだ、方言の語詞においても、変動の少ない時期であった。

小変化型が多いなかで、西進型のように、接境地帯から西方に語詞の進出が見られるものもある。「よだ

れ」におけるツ系の語詞と、「恐ろしい」におけるオゼの分布が西へ伸びている。『中国地方五県言語地図』の調査時点において、すでにツ系の語は接境地帯をわずかに越えて分布していた。本調査時点では、ツ系の語詞は、さらにその分布を西に広げ、石見地方の西側にあるツズの分布域をせばめるまでになっている。一方、オゼは、出雲市と松江市を含む、島根半島とその南部に分布していた。周囲には、オゾイの分布域が広がっており、オゼを取り囲んでいた。『中国地方五県言語地図』の調査時点から25年後の本調査時には、オゼは、出雲市からさらに西へと分布域を広げ、接境地帯まで達している。

ツ系の語詞とオゼに共通するのは、いずれも出雲市においてその使用の見られる語詞であるという点である。「よだれ」に関しては、出雲市においてゴボズが最も優勢であると思われるけれども、“チ”もまた出雲市を含めてその周辺に分布している。この“チ”が接境地帯付近で“ツ”になり、さらに接境地帯を越えて西方に分布していると考えてよかろう。一方、オゼに関しては、出雲市の中心付近では、オジュの音形で回答があり、接境地帯付近へ近づくと従って、オゼー、オゼへと形を変えている。そして、これらの語詞が勢力を広げた背景には、出雲市の力というものがあるのではないかと考えられるのである。出雲市は、本調査の調査地域のなかでは、政治・経済の面で中心的な役割を担うばかりでなく、文化的にもかなり高い地位にある。地域内の中核都市がその周辺の地域へ言語的な影響を及ぼすことは、陣内（1993）においても指摘されていることである。

「まむし」の語詞のなかで、とくにマモシの分布を見ると、出雲市を中心とした分布が顕著に現れている。出雲市を中心にして扇形に勢力を拡大しているのことができる。マモシは、『中国地方五県言語地図』の調査時点では、島根半島と出雲市、簸川郡佐田町と接境地帯の一部に分布していた。当時、この一帯ではマムシが優勢であった。マモシは、25年の間に接境地帯の出雲側一帯に勢力を拡大していったのである。この間に次のようなことが起きたのではないだろうか。まず、出雲市で採用されていたマモシが、出雲市において地域共通語となった。それと同時に、出雲市の文化的な優位性を背景にして、マモシは顕在的な威信（overt prestige）を持つようになった。その後、次第に簸川郡や飯石郡などの周辺地域も、その威信にひかれて、

マモシを採用するようになった。したがって、マモシの分布は、出雲市を中心とした分布を見せるようになったのであろう。

しかし、出雲市の文化的な力に対抗して、出雲市の方向へと勢力を拡大させている語詞もある。つまり、分布上は、接境地帯から東側へと勢力を拡大しているのである。「夫婦」におけるミョートと「にわか雨」におけるユダチの場合、中国地方に広大な分布域を持っている。その勢力の強さを背景に、出雲文化圏へ進出していると見ることができる。また、共通語との語形の一致あるいは類似が、語詞に権威を持たせ、採用する動機付けとなっていることも、ミョートとユダチの勢力拡大に関係しているとも考えられる。

共通語の影響が顕著に現れているのが、「たわし」である。『中国地方五県言語地図』の調査時点において、すでにタワシという語形は、この地域にも分布していた。しかし、タワシの分布は、トギナワやソーラと共存するものであり、優勢なのは、後者の方であった。トギナワは、鳥根県東部のみならず、鳥取県、広島県、岡山県にも広く分布し、ソーラも鳥根県西部から山口県にかけて分布していた。出雲方言と石見方言の接境地帯はこの二大勢力がぶつかる最前線であった。この様相が、25年の間に一変したのである。その原因は、共通語と同語形のタワシと、音訛形のタワスが、共通語の権威を背景にして、多くの地域で採用されたためである。この場合には、西進型とか東進型とかいった呼び方は当たらない。まさに、空からばらまかれたように一挙に分布域が出来上がったとも言えるべきであろう。若年層では、このような変化が多くの語詞において見られる。「たわし」の分布に、共通語の勢力拡大の予兆を見ることができると言えようか。

## Ⅶ おわりに

本調査で比較の対象とした、老年層の生活してきた25年間は、比較的变化の少なかった時代だと思われる。しかし、二世代後の若年層の時代には、状況が急変する。25年と言わず、10年あるいは5年という短期間に、少なからぬ言語変化が引き起こされるようになった。今回は取り上げなかった若年層のデータを見ると、方言の語詞の衰退状況に驚かされる。この点については、あらためて報告したい。

(注) 本稿で取り上げた語詞は、次のような質問を用いて収集したものである。

・「かっぱ(河童)」(図1)

(かっぱの絵を提示して) 子どもの形をして水中に住むという想像上の動物を何と言いますか。

・「“おどろく”の意味」(図2)

「おどろく」ということばを目が覚めるという意味で使いますか。

・「(高い) だろう」(図3)

「高いだろう」という時、「高いダラー」と言いますか。それとも「高いダロー」と言いますか。

・「めだか(目高)」(図4)

(めだかの絵を提示して) 小川などに群れをつくってすみ小さな魚です。体は3cmくらい。目が大きい。この魚を何と言いますか。

・「よだれ」(図5)

赤ん坊がよく口から水のようなものをたらしていることがありますか。その水のようなものを何と言いますか。

・「恐ろしい」(図6)

大きな犬が何匹もほえかかって、今にもかみつきのようになる。そんなときの感じをどんなだと言いますか。

・「夫婦」(図7)

結婚している男性と女性をあわせて何と言いますか。

・「にわか雨」(図8)

急に降ってくる雨のことを何と言いますか。

・「たわし」(図9)

(たわしの絵を提示して) 毛をたばねたもので、食器を洗ったり、みがいたりすることに使います。

・「まむし(蝮)」(図10)

(まむしの絵を提示して) 毒を持っている種類ですが、何と言いますか。色は茶色で、黒い銭形の紋があります。

## 参考文献

- 陣内正敬 1993 『地方中核都市方言調査報告—福岡市・北九州市—』九州大学言語文化部日本語科  
 広戸 惇 昭和40 『中国地方五県言語地図』風間書房  
 広戸 惇 昭和61 『方言語彙の研究』風間書房

### Summary

In 1986, we have studied in the area of the old Izumo clan and the old Iwami clan in Shimane Prefecture for the research, "Border area between Izumo and Iwami", to find out the diversity in regional dialects.

There are two references which are available for this research, namely "LINGUISTIC ATLAS OF JAPAN" and "LINGUISTIC ATLAS OF THE FIVE PROVINCE OF WEST JAPAN". From the references, we could find explicit difference among the two areas in the use of the words. The former studies in the references were conducted 25 years prior to our study.

The purpose of this study is to compare the changes in the two dialects of the areas from the chronological viewpoint, namely the former study and our study.

The types of changes can be classified into the five types.

- (Type A) There is no explicit difference in the use of words. And 70% of the result in our study falls into this type.
- (Type B) The use of words in Izumo area affected the ones in Iwami area.
- (Type C) The use of words affected nearby areas from the core city Izumo.
- (Type D) The use of words in Iwami area affected the ones in Izumo area.
- (Type E) New commonly used words were developed and became a wider use in the two areas.

It seems that type B and type C are the result of the strong influence by the core city Izumo which has a strong political, economical and cultural power in the areas.